

MIMIC モデルによるアイデンティティの実感としての充実感の構造の検討

大野 久* 茂垣(若原)まどか** 三好 昭子*** 内島 香 絵***

本研究の目的は、充実感モデル(大野, 1984)に示された要因に基づき、多重指標多重原因モデル(MIMICモデル)を構成し、その構造を吟味することである。このモデルでは、「自立・自信」、「連帯」、「信頼」が潜在変数「包括的アイデンティティ」に影響し、その「包括的アイデンティティ」が、「充実感気分」、「満足感」に影響するであろうことが想定された。調査は、285名の大学生が充実感尺度(大野, 1984)と人生満足度尺度(Diener et al, 1985)に回答した。そこで本研究ではこのモデルに関して、共分散構造分析の結果、このMIMICモデルのデータへの適合度が高く、現在でも充実感モデルに示された要因が妥当であること、男女ともに同じモデルが適合し頑健性の高いモデルであることが示された。また、充実感が青年期に限らず、生涯発達を通じての包括的アイデンティティの実感である「満たされた感じ」である可能性が示唆された。

キーワード：充実感，共分散構造分析，アイデンティティ，大学生

問 題

Eriksonのアイデンティティ概念とアイデンティティの感覚 a sense of identity

Erikson(1950)は、人格発達を8つの発達段階に理論化した漸成発達理論 epi-genetic chart の中で、その第5段階である青年期の主題をアイデンティティ対アイデンティティ拡散であると述べ、青年期におけるアイデンティティの感覚の獲得の重要性を強調した。

また、Erikson(1950)は、アイデンティティそのものの明確な定義を行ってはいないが、意味内容を要約すると、その個人個人の社会との関係における(心理-社会的 psycho-social な)自己定義に関する「自覚、自信、誇り、責任感、生きがい感」の総称といえる。そのため、各個人のアイデンティティの内容そのものを測定しようとするのは、個人個人の社会的状況、自己定義の具体的な中味を直接問うことになるので、その測定は非常に困難である。

しかし、この点に関して、Erikson は、「感覚」、「～という感じ」 a sense of～という語について“健康感”とか「うまくいっていない感じ」といった‘感覚’は、表層と深層、意識と無意識の双方にまたがっている。このような感覚は(まさにその中で意識的な経験が発達する)その内省によって近づきうる意識的な‘経験’の仕方であり、他人にも観察可能な‘行動’の仕方であり、テストや分析方法によって実証可能な無意識的な内的状態である”

(Erikson, 1959)と説明している。その上で、アイデンティティの感覚とは“内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力(心理学的意味での自我)が他者に対する意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信”であると説明している。つまり、各個人のアイデンティティの内容は、人によって違うので直接、測定は困難であるが、自分がどのように生きていくかという主体的な自分自身の自己定義と、社会から何を期待され、その「～としての自分」という役割を引き受けて生きていく社会的な意味での自己定義が一致しているという自信の感覚は、一般的共通特性として測定可能であることが述べられている。

大野(1984)の充実感研究で示されたこと

アイデンティティ概念がErikson(1950)によって提唱されて以来、アイデンティティそのもの、もしくは、その状態を測定しようとする試みが、数多くなされてきた(砂田, 1979; Rasmussen, 1961, 1964; 宮下, 1987; 加藤, 1983; 下山, 1992; 谷, 2001など)。しかし、これらの研究によって開発された尺度は、アイデンティティ統合の方

* 立教大学文学部 〒359-1133 所沢市荒幡681-1
GFA01442@nifty.ne.jp

** 立教大学非常勤講師 〒338-0002
埼玉県さいたま市中央区下落合2-15-17-305
blackcat@roy.hi-ho.ne.jp

*** 立教大学大学院文学研究科
〒204-0023 東京都清瀬市竹丘1-17-26-728
infini@dol.hi-ho.ne.jp (三好)
〒104-0052 東京都中央区月島4-4-1-505
uchijima@mba.ocn.ne.jp (内島)

向に向かっている青年たちが取るであろう行動、意識、感覚、感情など統一されていない次元を測定するものや、Eriksonの原著の表現をそのまま使ったものなどが多かった(例外的に、谷, 2001は、アイデンティティの感覚に焦点を当てた測定尺度を作成している)。

これらに対して、大野(1984)は、上述の a sense of identity という考え方を念頭に、アイデンティティの感情・感覚的側面に観点を絞り、「生活にハリがある」、「生活に充実感で満ちた楽しさがある」などの青年期に感じられる充実感について、尺度構成とその構造について因子分析による研究を行った。その結果、「充実感気分—退屈・空虚感因子(以下、充実感気分)」、「自立・自信—甘え・自信のなさ因子(以下、自立・自信)」、「連帯—孤立因子(以下、連帯)」、「信頼—時間的展望—不信・時間的展望の拡散因子(以下、信頼)」の相互に相関の高い4因子が抽出され、その結果をもとに20項目からなる充実感尺度を構成した。

その項目内容は、第1因子「充実感気分」は、「生活に充実感で満ちた楽しさがある」、「私は生きがいのある生活をしている」など、文字通り生活における充実した気分を、第2因子「自立・自信」は、「私は精神的に自立していると思う」、「私は主体的に生きていると思う」など、主体性に基づいた自立感とその自信を測定している。第3因子「連帯」は、「だれも私を相手にしてくれないような気がする」、「私ひとりがとり残されているようで寂しい」と、逆転項目で構成されているが、社会とのつながりのある感じや連帯感を、第4因子「信頼」は、「自分の責任を果たすことに喜びを感じる」、「生まれてきてよかったと思う」など、自分の人生に関する意味感と、人生への肯定感を測定している。

これらの構成された下位尺度は、それぞれ、「充実感気分」は、生活気分、生活感情の部分であり、「自立・自信」は、漸成発達理論の第5段階の主題：アイデンティティが統合の方向に向かう際に感じられる感覚、「連帯」は、第6段階の主題：連帯を持ち得ている感覚、「信頼」は、第1段階の主題：健全な人格発達の基礎をなす基本的信頼感に裏打ちされた人生への肯定感であると考察された。加えて、これらの下位尺度得点が高い正の相関係数を示している。

さらに、大野(1984)は、時系列に測定した充実感尺度のデータを identical factor score method による因子分析し、時系列から見た場合、生活気分の側面を測定していると考えられる「充実感気分」が、Erikson(1959)の漸成発達理論図に示された自我発達の主題に

関する感覚、「自立・自信」、「連帯」、「信頼」に比較して、相対的に得点が不安定であることを見出した。このことから、大野(1984)は、相互に相関の高い因子のうち、時系列に安定した因子が、不安定な因子の得点変動の原因になっていること、すなわち、「自立・自信」、「連帯」、「信頼」が「充実感気分」の得点変動の原因になっていることを推測した。

こうした分析によって得られた知見から、大野(1984)は、理論的に示された「現代日本青年の心情モデル」(西平, 1979)を検討し、「内容の拡大された心情モデル」(FIGURE 1以下、充実感モデルと呼ぶ)を示した。この充実感モデルは、上述の研究結果を「充実感気分」を表す上底面と「退屈・空虚感」を表す下底面を持つ三角柱として示している。また、個人の持つ「充実感気分」と「退屈・空虚感」の水準は、縦方向の3本の軸、「自立・自信」、「連帯」、「信頼」の水準によって説明されることを示している。さらにこのモデルの上方向は、アイデンティティ統合の方向に、下方向は拡散の方向に対応している。

Erikson(1959)は、漸成発達理論図の中で人格発達における各発達段階の主題の肯定的方向での解決が、後の発達段階の主題の解決に肯定的に働くという考え方を示した。充実感モデルは、それぞれの因子がまとまりを保ち、かつ全体として同じ方向性を持つ相関を持つ

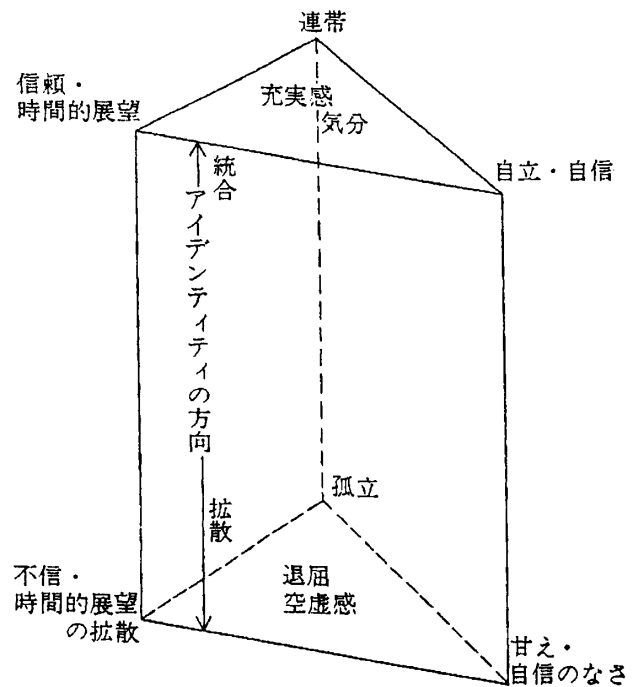


FIGURE 1 内容の拡大された心情モデル(充実感モデル)
(大野, 1984)

ちながら、充実感気分を説明することを示しており、充実感モデルは漸成発達理論図と理論的に同じ内容を示している。

これまでの充実感尺度を用いた研究

充実感尺度を用いたこれまでの研究を概観すると、佐藤・赤澤・寺川(1996)、谷(2001)など、充実感尺度の得点とアイデンティティを尺度法で測定した得点との関係を吟味した研究によって、充実感尺度の得点とアイデンティティの得点との間に有意な正の相関が確認されている。また、大野(1987)、三川・井上・芳田(1991)、渡邊・赤嶺(1996)、森・河村(2001)など、充実感尺度得点とアイデンティティ・ステータスの関係を吟味した研究によって、達成群、もしくはコミットメントの高い群(現在自己投入群など)の得点が他の群と比較して、充実感が高いことが示されている。

その他、具体的な青年の生活の中での充実感の感じ方を吟味した研究(大野,1991)、充実感尺度の再分析(辻岡・小高,1993)、充実感尺度と価値観の関連を吟味した研究(佐藤,2001)、友人関係との関連と充実感の発達差に関する研究(岡田,2002)、充実感と親子関係との関連(若原,2003)などがある。

ところで、アイデンティティ形成が漸成発達理論という生涯発達を見通した理論の中における青年の主題であることを考えると、充実感が青年期のアイデンティティ形成だけに関連した感情であるか、他の発達段階、その主題も関連しているのではないかという視点が考えられる。

しかし、漸成発達理論と充実感の関係を吟味した研究は数少なく、大野(1993)、三好・大野・内島・若原・大野(2003)があるのみである。これらの研究では、充実感と漸成発達理論に示された他の発達段階の主題の達成度を測定した得点との間に有意な正の相関が見出されている。

充実感の構造に関する新しい仮説

従来の大野(1984)の充実感研究では、自立・自信、連帯、信頼から直接充実感との関連を吟味し、そこにある有意な正の相関と、時系列に見たときの得点の安定性から、自立・自信、連帯、信頼が直接、充実感気分水準に影響を及ぼす因果関係が推測できる要因であるというモデルを考えていた。このモデルは、その相関関係から、ある程度の妥当性は示されたが、それらの要因の相互の関連は明らかではなく、充実感の水準に影響すると推測できる関連する要因の発見という程度の知見であった。

この知見からは、充実感気分が青年期に形成される

自立・自信を中心とした狭義のアイデンティティの実感であり、連帯や信頼はその関連要因なのか、あるいは自立・自信、連帯、信頼を含み込んだ生涯全体の人格形成に関わる実感であるのかという問題については、依然として明確ではない。

三好ほか(2003)の、充実感と、漸成発達理論に示された8つすべての発達段階の主題のうち、第8段階の統合性をのぞく7つの主題の達成度の得点との間に有意な正の相関があるという知見から推論すると、すべての発達段階の主題の達成が、生涯全体の人格形成を形作っており、その実感として充実感が感じられるという仮説を考えることができる。

いいかえると、充実感とは、青年期のアイデンティティの形成という主題に関連して感じられるだけでなく、青年期以前的人格形成の実感としても、また、青年期以降の初期成人期の親密性や、成人期の生殖性の達成感としても感じられるものではないかと考えられる。

この考えについて、漸成発達理論から考察しよう。Eriksonは、青年期以後の親密性、生殖性、統合性の主題を説明する際に、beyond identityという表現を用い、“人間の核心にとってはアイデンティティよりもっと重要なものが存在するということ、(中略)それは、心理的アイデンティティを超越することができ、またそれを乗り越えて生き残らなければならぬものである”(Erikson, 1968)と述べている。

この表現をより具体的に解釈すると、青年期までの漸成発達は、自己へのエネルギーの集中、自分が自信を得るまでのプロセスであるのに対して、初期成人期以降の発達は、アイデンティティの統合とともにそのエネルギーが、配偶者、次世代のはぐくみ、職業などという形をとった社会的活動として、青年期に選び取ったアイデンティティの実践を通じて、実現していくプロセスと考えることができる。また、青年期以後の主題の達成のためには、青年期まで中心の主題であった自己への関心だけにとらわれることなく、それを超越して、関心が他者や社会に向かって拡がっていく必要性と、同時に必然性を述べている。そして、初期成人期以降においても青年期と同様に、その過程で、充実感が感じられるのではないかと考えられる。

また、西平は、Eriksonを解説する中で、“より包括的なアイデンティティのホールネス the wholeness of a more inclusive identity”(西平,1993)という表現を用いている。ホールネスとは、“個々の、互いに全く異なる各部分さえもが、有効なまとまりをなし、一つの組織となるような各部分の集まり”(西平,1993)である。

この説明は、“絶対的な境界が強調された形で、一つのゲシュタルト” (西平, 1993) としての固く、閉じた全体主義 totalism に対比させて、望ましい、柔軟で、開いた一つの人格のまとまりを表現するものとして用いられたものであるが、この表現が、人生 8 段階を総括した総合的な自我発達、人格発達の全体像をイメージしている表現であると考えられることもできよう。この考えにしたがって、上述の漸成発達理論における全体としての人格形成の結果を、青年期に中心の主題となるアイデンティティ ego identity に対比させて、(当然 ego-identity も含み込んだものであるが) より包括的なアイデンティティ inclusive identity と呼ぶことにする。

本研究の目的：共分散構造分析による新しいモデルの吟味

上述したアイデアを充実感尺度の下位尺度得点間の関係として考えると、自立・自信、連帯、信頼が包括的なアイデンティティを規定し、さらにその包括的なアイデンティティが充実感を規定しているという FIGURE 2 に示すモデルを描くことができる。

ところで、ここでの包括的なアイデンティティは、直接測定された概念ではなく、モデル上想定される構成概念である。大野 (1984) の時点では、直接測定されていない構成概念を含めて総合的に関係を推測するモデルを検討する方法は存在せず、こうしたモデルを検討することは困難だった。しかし、近年、共分散構造分析の普及により、こうした構成概念、つまり潜在変数を含めた「多重指標多重原因モデル¹ Multiple Indicator Multiple Cause Model (以下、MIMIC モデル)」を検討することが可能となった。したがって、本研究では、まず、包括的なアイデンティティという潜在変数も含めたモデルに関して共分散構造分析を用い、そのモデルの妥当性を検討することを目的とする。

次に、大野 (1984) では、平均値の水準、因子分析の結果の検討などから、充実感モデルに男女差はないと考え、男女のモデルの違いの吟味を行っていない。しかし一方で、Hodgson & Fischer (1979) などによるアイデンティティと親密性の発達のバランスに男女差があるという議論もある。この発達のバランスに男女差があるとすると、充実感気分を説明する構造が男女で違う可能性もあり、これに関する検討が必要である。そこで、本研究では、男女のデータに同じモデルが適用できるか否かについて、多母集団による同時分析という手法を使って、これを検証する。さらに、男女の

データに同じモデルが適用できるとされた場合、多母集団による同時分析は、属性の違ういくつかの母集団に、同じモデルが妥当するか否かというモデルの頑健性を検討する事にもなる。

検討する手順として、①男女を別の母集団と考えた多母集団による同時分析を行い、モデルのあてはまりの良さを吟味する。②こうした検討の結果、男女のデータを別々の母集団から得られたデータと考える必要がない可能性が見出された場合、男女のデータを同一の母集団から得られたデータとして考え、モデルのあてはまりの良さを吟味する。こうした段階をたどることで、男女のデータについてのモデルのあてはまりの良さと、モデルの頑健性を検討する。

方 法

質問紙 ①充実感尺度 (大野, 1984) 充実感尺度 53 項目のうち、大野 (1984) の研究 II で用いられた、4 つの因子に高因子負荷量を得た上位 5 項目ずつ計 20 項目を用いた。項目例は、第 1 因子「充実感気分」: 「毎日、毎日変化のない単調な日々でつまらない」、第 2 因子「自立・自信」: 「私は精神的に自立していると思う」、第 3 因子「連帯」: 「だれも私を相手にしてくれないような気がする」、第 4 因子「信頼」: 「自分の責任を果たすことに喜びを感じる」などである。各項目に対する回答は、「今の自分に非常にあてはまる」(5 点), 「今の自分にややあてはまる」(4 点), 「どちらともいえない」(3 点), 「今の自分にはあまりあてはまらない」(2 点), 「今の自分に全くあてはまらない」(1 点) の 5 段階評定である。

②人生満足度尺度 (Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985) (以下、満足感) この尺度は、主観的幸福感のうち特に人生についての肯定的認知を測定するために開発された。ここでいう主観的幸福感とは、長期間にわたる主観的な肯定的認知と肯定的感情をさす。本研究では、共分散構造分析で、識別可能なモデルに必要な変数の数を確保するためにこの尺度を加えた²。またすでに、充実感尺度の各下位尺度の並存的妥当性は、大野 (1984) において実存心理検査 Purpose-in-Life Test (佐藤, 1975) との間で検討し妥当な結果を得ている。しかし、満足感とは、特にモデルで基準変数となる「充実感気分」と、変動しやすい肯定的な気分や感情という

¹ 複数の観測指標によって構成概念が規定され、その構成概念が複数の観測変数の原因になっているモデル。

² 本研究に用いたモデルでは、基準変数が充実感だけの場合、「推定すべき母数の数が標本分散と標本共分散の数以下でなければならない」という識別のための必要条件を満たしておらず、自由度が負の値になるためモデルが識別されない。

意味で関連の強い内容を測定していると考えられるため、データの蓄積という意味からあらためて並行的妥当性を検討するためにこの尺度を用いた。項目内容は 1. 「あらゆる面で私の人生は、私の理想に近い」、2. 「私の人生の状態はすばらしい」、3. 「私は自分の人生に満足している」、4. 「人生の中で、望んだことはすべてかなえてきた」、5. 「私が人生を終えるとき、悔いはほとんどないだろう」の 5 項目である。各項目に対する回答は、「非常にあてはまる」(7 点)、「あてはまる」(6 点)、「ややあてはまる」(5 点)、「どちらともいえない」(4 点)、「あまりあてはまらない」(3 点)、「あてはまらない」(2 点) から「全くあてはまらない」(1 点) までの 7 段階評定である。

被調査者 被調査者は、東京都内の私立 4 年制大学生、男性 117 名、女性 168 名、計 285 名 (平均年齢 19.9 歳) である。

調査時期, 調査方法 調査は 2000 年 6 月に、講義時間内に質問紙調査を集団実施した。

尺度の信頼性, 妥当性 充実感尺度の各下位尺度と満足感尺度の平均値, SD, α 係数と男女の平均値を TABLE 1 に示した。信頼性を示す α 係数は $\alpha = .69 \sim .89$ で、非常に高いとはいえないが、分析には十分耐えうると判断できる数値であった。また、今回の調査では、「自立・自信」で男子の得点が、「信頼」で女子の得点が有意に高いという男女の平均値の差が見られた (いずれも $p < .05$)。

尺度間相関を TABLE 2 に示した。充実感尺度の各下位尺度の並行的妥当性を検討する意味で、満足感尺度との相関を吟味すると、 $r = .39 \sim .64$ (いずれも $p < .001$) であり、中程度からそれ以上の相関が見られた。特に充実感気分とは、 $r = .64$ ($p < .001$) の相関があり、その並行的妥当性は、本調査においてもあらためて確認できたと考えられる。

結 果

モデルの構成

充実感モデルにしたがって、観測変数「自立・自信」、「連帯」、「信頼」が潜在変数「包括的アイデンティティ」を説明し、その「包括的アイデンティティ」が、観測変数「充実感気分」、「満足感」を説明するという研究仮説に基づき MIMIC モデル (豊田, 1998) を作成した (FIGURE 2)。なお、モデルを識別させるために、「包括的アイデンティティ」から「充実感」へのパスを値 1 の固定母数に指定した。

共分散構造分析による MIMIC モデルの検討

共分散構造分析は、次の手順で行われた。なお、分析のためのソフトウェアは、Amos ver. 4 を用いた。

①まず、変数の配置のみ同じで、変数間のパスの値、「信頼」「連帯」間、「連帯」「自立・自信」間、「信頼」「自立・自信」間の共分散、「充実感気分」「満足感」「包括的アイデンティティ」の誤差 $d1$, $e2$, $e3$ の分散は同じであるという制約をかけずに MIMIC モデルについて男女の多母集団による同時分析を行った (分析 1)。②次に、MIMIC モデルについて、変数の配置と、上述のパス、共分散、分散が男女ですべて同じという制約をかけ、男女の多母集団による同時分析を行った

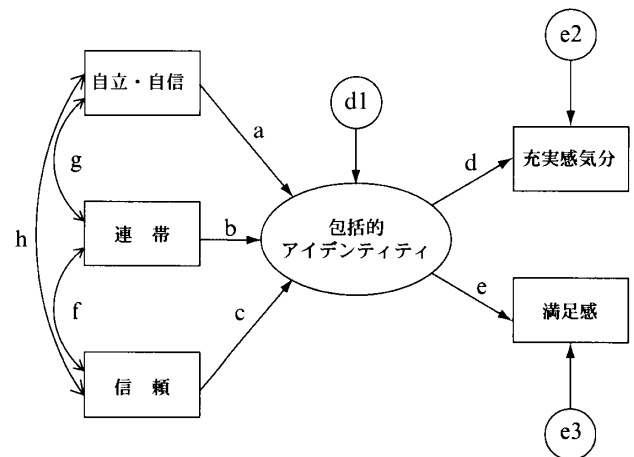


FIGURE 2 充実感の構造に関する MIMIC Model

TABLE 1 各下位尺度の α 係数, 平均値の男女差

		平均値	SD	α 係数	男性平均値	女性平均値	t 値	有意差
充実感気分	5 項目: 5 件法	3.2	.94	.89	3.1	3.2	-1.37	
自立・自信	5 項目: 5 件法	3.2	.74	.73	3.3	3.1	2.51	*
連帯	5 項目: 5 件法	3.3	.84	.78	3.2	3.4	-2.38	*
信頼	5 項目: 5 件法	3.5	.69	.69	3.5	3.5	-.35	
満足感	5 項目: 7 件法	3.8	1.14	.83	3.6	3.9	-1.67	

* $p < .05$

注) 平均値は、充実感尺度の各下位尺度、および人生満足度尺度の合計得点を項目数で除した値である。

TABLE 2 下位尺度間の相関

	充実感気分	自立・自信	連帯	信頼	満足感
充実感気分	1.00				
自立・自信	.37	1.00			
連帯	.54	.25	1.00		
信頼	.63	.42	.39	1.00	
満足感	.64	.39	.60	.60	1.00

(いずれも $p < .001$)

(分析2)。③最後に、男女が同じ母集団から得られたデータと考え、男女を合併したデータを用い、分析を行った(分析3)。

それぞれの分析によって、推定されたパスの係数、共分散、分散の標準化解とモデルの適合度を示す値をTABLE 3に示した。

なお、モデルの適合度を示す指標は、モデルの評価のために、帰無仮説 H_0 ：「構成されたモデルは正しい」とした χ^2 検定の結果と、モデルの評価の指標である適合度指標 GFI, 修正適合度指標 AGFI, 平均二乗誤差平方根 RMSEA, 赤池情報量基準 AIC を示した³。

それぞれの結果について検討する。まず、①男女のデータが別々の母集団から得られたデータと考え、そのデータに対する共通したモデルのあてはまりを吟味する多母集団の同時分析を行った。配置のみ同じで、パス、共分散、分散が男女で同じという制約をかけずに行った分析1では、 χ^2 検定の帰無仮説は棄却されず、さらに、その他の適合度の指標は、データへのMIMICモデルのあてはまりがよいことを示した。

②そこで、さらに、MIMICモデル内のパス、共分散、分散が男女で同じという制約をかけて分析2を行った。その結果、 χ^2 検定の帰無仮説は棄却されず、さらに、その他の適合度の指標も分析1と同程度の値が得られた。特に、AICは分析1よりも値が減少し、制約の厳しいほうが、データへのMIMICモデルのあてはまりのよさを示した。

③以上の分析の結果、本研究のMIMICモデルについては、男女に全く同じモデルがよくあてはまり、男女を別に考える必要はなく、同じ母集団から得られたサンプルと見なすことができると考えられる。そこで、

男女のデータを合併した分析3を行った。その結果、 χ^2 検定の帰無仮説は棄却されず、さらに、その他の適合度の指標も分析1, 2と同程度の値が得られた。特にAICは分析2よりも値が減少した。このことから、男女のデータが一つのMIMICモデルで説明されることが示された。

同時にこのことは、モデルの頑健性を示す一つの証拠になる。

MIMICモデルに示された変数間のパスの係数

最終的な分析3の標準化解で示されたそれぞれの変数間のパスの係数をみると、潜在変数「包括的アイデンティティ」から、観測変数「充実感気分」へのパス.79、「満足感」へのパス.81は、同程度に高く、観測変数「自立・自信」から潜在変数「包括的アイデンティティ」へのパス、同じく「信頼」からのパス、「連帯」からのパスでは、「信頼」.53、「連帯」.48、「自立・自信」.13の順に高い値であった。

考 察

充実感の構造を共分散構造分析で分析した意義

共分散構造分析を用いた検討の結果、全体として、「自立・自信」、「連帯」、「信頼」の相互に相関のある次元が、構成概念「包括的アイデンティティ」に影響を及ぼし、それがさらに「充実感気分」に影響しているというMIMICモデルの妥当性が示された。

問題で述べたように、充実感モデル(大野, 1984)は、その時点では identical factor score method を用いた因子分析の結果から仮説的に推測されたものに過ぎなかった。しかし、共分散構造分析によって、「包括的アイデンティティ」という潜在変数を含む分析が可能となり、初めて実際のデータのモデルへのあてはまりのよさを検討することが可能となった。

充実感モデルの妥当性

まず第1に、基本的に大野(1984)で予測された充実感モデルの構造が、現在でも有効なものであり、20年という世代を超えてある程度の普遍性を有するものであることが示された。さらに、充実感モデルの構造をMIMICモデルを用いて分析し、自立・自信、連帯、信頼と充実感気分をつなぐものとして、「包括的アイデンティティ」という構成概念の存在を考慮することが理論的に可能であることが示された。

第2に、男女のデータに対するモデルの適用について検討する。男女のデータが別の母集団から得られたものと仮定した多母集団の同時分析のプロセスを経ることにより、今回の調査データでは、「自立・自信」と

³ χ^2 検定の結果は通常の統計的検定における仮説の設定とは逆で、帰無仮説は棄却されないほうがモデルの妥当性が示される。GFIは、最大値が1であり、議論はあるものの経験的に.9以上必要とされている。AGFIは、GFIとの差が小さい方がよいとされる。RMSEAは、.05以下であればあてはまりがよいとされる。AICは、モデルを比較する際に、値が相対的に小さいほどよいモデルとされる(豊田, 1998)。

TABLE 3 MIMIC モデルの推定値と適合度指標

記号	標準化係数	分析1		分析2	分析3
		多母集団の同時分析 制約なし男子 制約なし女子		多母集団の同時分析 男女で係数, 共分散, 分散同じ	男女同じ母集団
a	包括的アイデンティティ←自立・自信	.13	.14	.14	.13
b	包括的アイデンティティ←連帯	.50	.45	.47	.48
c	包括的アイデンティティ←信頼	.49	.57	.53	.53
d	充実感気分←包括的アイデンティティ	.81	.77	.79	.79
e	満足感←包括的アイデンティティ	.84	.78	.81	.81
相関					
f	連帯↔信頼	.34	.41	.39	.39
g	連帯↔自立・自信	.34	.23	.28	.25
h	信頼↔自立・自信	.48	.40	.43	.42
乖離度 (χ^2)		3.26		13.46	2.66
自由度		4		17	2
確率		.52		.71	.27
GFI		.995		.982	.996
AGFI		.966		.968	.972
RMSEA		.000		.000	.034
AIC		55.258		39.445	28.659

注：記号は、FIGURE 2 における係数の位置を示す。

注：適合度指標は小数点以下3桁まで意味があるため表示した。

「信頼」の下位尺度の平均値レベルで男女差が見られたものの、充実感モデルに示された相関関係、因果性に関する推測について同じ構造を持っていることが示された。Hodgson & Fischer(1979)はアイデンティティ形成過程において、男性に比較して、女性は他者との関係が重要である点を指摘した。この点から考えると、女性は、充実感気分の原因と考えられる「包括的アイデンティティ」に対する「連帯」の影響が大きい可能性も考えられる。しかし、本研究の分析の結果、そうした男女差は見出されず、充実感気分を感じる構造については男女が変わりはないことが示された。

第3に、多母集団の同時分析は、同時にこのモデルの頑健性を示す結果にもなった。

アイデンティティ研究における個と関係性の関係という観点からの考察

アイデンティティの様相に関する議論の中で、個としてのアイデンティティは関係性の中に包含され、関係性の中から現れるとする見解(杉村, 1999 など)と、「個」としてのアイデンティティの側面と「関係性」に基づくアイデンティティの側面のバランスと統合が、成人期のアイデンティティの成熟した様態であるとする見解(岡本, 1999, 2002)がある。

充実感尺度の下位尺度「自立・自信」が、相対的に「個」としてのアイデンティティの側面の感覚を測定

し、連帯が「関係性」に基づくアイデンティティの側面の感覚を測定していると考えると、自立・自信と連帯が一つの「包括的アイデンティティ」に影響しているという結果は、この両側面は不可分であり、一つのアイデンティティを構成する要素と考えることが妥当であろう。その意味では、岡本(1999, 2002)の見解を支持する方向の結果である。

「信頼」は、乳児期の主題「基本的信頼対不信」とその青年期における現れである「時間的展望対時間的展望の拡散」に対応しており、「連帯」は初期成人期の主題「親密性対孤立」に対応していると考えられる。したがって、これまでのように充実感を「健康なアイデンティティ統合の過程で感じられる生活感情、自我感情」と考えると、「信頼」や、「連帯」よりも、青年期の主題「アイデンティティ対アイデンティティ拡散」に対応している「自立・自信」が「充実感気分」や「満足感」を規定する「包括的アイデンティティ」に大きな影響を持つことが予想された。

しかし分析の結果、見かけの相関では、「自立・自信」「充実感気分」の間には有意な値が示されており、また、共分散構造分析における「自立・自信」、「連帯」、「信頼」間の相関(標準化された共分散)は高く、全体としての関連はあるのだが、パスの係数を見ると、「連帯」、「信頼」に比較して、「自立・自信」の値は低かつ

た。このことは、「連帯」、「信頼」の「包括的アイデンティティ」への影響よりも、「自立・自信」の影響は相対的に小さいことを示している。

この問題については以下のように考察される。まず、MIMIC モデルに示されたように「充実感気分」とそれを規定する「包括的アイデンティティ」は、個に焦点を当てた「自立・自信」だけから、もしくは関係性に焦点を当てた「連帯」だけによって説明されるものではなく、その双方の影響をうける一つの構成概念「包括的アイデンティティ」の実感である。しかし同時に、「自立・自信」と「連帯」「信頼」が「包括的アイデンティティ」に及ぼす影響の大きさを比較すると、見かけの相関よりも「連帯」「信頼」の影響力が相対的に大きい。このことから、「充実感気分」をささえる「包括的アイデンティティ」は、青年期に限定したアイデンティティ形成の問題ではないこと、また、「充実感気分」は、「自立・自信」、「連帯」、「信頼」から総合的に構成される「包括的アイデンティティ」の反映、つまり、生涯発達の人格形成のプロセスにおける自己肯定的な感覚、実感の反映と考えることがより妥当性があると思われる。

包括的アイデンティティとその感覚としての充実感についての考察

前項の議論を踏まえて、今回の研究で示された構成概念「包括的アイデンティティ」について考察する。

アイデンティティは漸成発達理論図の第5段階である青年期の発達主題である。しかし同時に、人生8段階のそれぞれの発達主題が相互に絡み合っているという漸成発達理論図の考え方からいえば、「アイデンティティの統合」という内容には、人生8段階を総括した総合的な自我発達、人格発達の全体像という意味合いもあるように思われる。

Erikson (1959) の漸成発達理論図に示された各発達段階の主題を生涯発達の視点から見ると、まず、人格的安定の基礎となる乳児期の基本的信頼を基盤として、「私がこれからの人生を何者としてどのように生きて行くか」の選択としての青年期のアイデンティティの統合がなされる。次に、その自己への関心と意味づけから、その後の一生のパートナーとの人間関係を作る初期成人期の親密性へ、さらには、次の世代の確立と指導に対する興味・関心である成人期の生殖性 (generativity) へと拡大していく。このように、Erikson(1959) の漸成発達理論図では、人の一生の人格形成は、単に閉じた自己確立ではなく、人間関係や社会とのつながりの中での自己の意味を感じられるようになっていく

ことの重要性が描かれていると思われる。このことは、今回の分析で検証されたモデルの内容と符合する考え方である。

充実感という観点から述べると、これまで充実感は、理論的には健康なアイデンティティの統合の方向に向かって実感として、青年期に限定的に考えられていた。しかし、充実感とは、「連帯」や「信頼」を通じて、他の発達段階においても、健康な人格発達に伴う実感 (たとえば、「満たされた感じ」、「うまくいっている感じ」 a sense of fullness) という形で感じられると考えられる。このように、充実感が生涯発達を通じての健康な人格発達の反映としての測定可能な自我感情、生活感情、気分であることが示唆される。しかし、この点に関しては、さらなる実証的なデータの収集と検討が必要である。

今後の課題

今後検討すべき課題としては、まず第1に、今回仮説として考えられた「包括的アイデンティティ」に関する吟味が、充実感尺度の下位尺度間だけの吟味に終わっていることがあげられる。また、その内容もアイデンティティに対応する「自立・自信」、親密性に対応する「連帯」、信頼感に対応する「信頼」の吟味だけであり、その意味では、今回の研究は仮説についての手がかりを得たという段階である。今後、Erikson and Social-Desirability Scale 日本語短縮版 (S-ESDS, 三好ほか, 2003) など、漸成発達理論のすべての主題について測定している尺度との関連から、さらに詳細な検討が必要であろう。

次に、今回のサンプルが青年期のデータに限られているため、生涯発達の視点からの「包括的アイデンティティ」を吟味するためには、さまざまな発達段階、特に、親密性、生殖性を主題とする初期成人期、成人期のデータ収集とその吟味の必要がある。

最後に、段階評定による意識を測定した量的データの内容的妥当性を検討するために、また、研究知見に具体性を持たせるために、面接法などによる具体的生活場面での充実感気分の感じ方などに関する質的データの収集とその吟味の必要があろう。

引用文献

- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. 1985 The Satisfaction With Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-75.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York : Norton. (エリクソン, E. H. 仁科弥生

- (訳) 1977 幼児期と社会 みすず書房)
- Erikson, E. H. 1959 Identity and the life cycle : Selected papers. In *Psychological Issues*. Vol.1. New York : International Universities Press. (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳) 1973 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H. 1968 *Identity youth and crisis*. New York : W.W. Norton & Company Inc. (エリクソン, E. H. 岩瀬庸理 (訳) 1973 アイデンティティ 金沢文庫)
- Hodgson, J. W., & Fischer, J. L. 1979 Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50.
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302. (Kato A. 1983 A study of identity statuses and their structure in university students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 31, 292-302.)
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1991 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (V) 一性役割および自我同一性と役割受容・充実感との関連— 追手門学院大学文学部紀要 25, 51-68. (Mikawa, T., Inoue, T., & Yoshida, S. 1991 A study of personality formation and mental health in adolescence (V) : Gender-role, ego-identity status and their relationship to role-acceptance and fulfillment feeling. *Faculty of Letters Review, Otemon Gakuin University*, 25, 51-68.)
- 宮下一博 1987 Rasmussenの自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, 35, 253-258. (Miyashita, K. 1987 An examination of the Japanese version of Rasmussen's Ego Identity Scale. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 35, 253-258.)
- 三好昭子・大野 久・内島香絵・若原まどか・大野千里 2003 Ochse & PlugのErikson and Social-Desirability Scaleの日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み 立教大学心理学研究, 45, 65-76. (Miyoshi, A., Ohno, H., Uchijima, K., Wakahara, M., & Ono, C. 2003 The development of a simplified version of Ochse and Plug's Erikson and Social-Desirability Scale (S-ESDS). *Rikkyo Psychological Research*, 45, 65-76.)
- 森美海子・河村茂雄 2001 大学生における同一性地位と充実感に関する一研究 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要, 11, 115-125. (Mori, M., & Kawamura, S. 2001 A study of ego identity status and fulfillment in undergraduates. *Journal of the Center for Educational Research and Practices*, 11, 115-125.)
- 西平直喜 1979 青年期における発達の特徴と教育 太田堯ほか(編) 子どもの発達と教育6 岩波書店 Pp.1-56.
- 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版会 (Nishihira, T. 1993 *The psychology and philosophy of E. H. Erikson*. Tokyo : University of Tokyo Press.)
- 岡田 努 2002 友人関係の現代的特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達の研究 金沢大学文学部論集, 22, 1-38. (Okada, T. 2002 Adaptation, self-images, friend-images and friendship in contemporary adolescents. *Studies and Essays. Behavioral Sciences and Philosophy*, 22, 1-38.)
- 岡本祐子 1999 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房
- 岡本祐子 2002 アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代青年の心情モデルについての検討 教育心理学研究, 32, 100-109. (Ohno, H. 1984 The fulfillment sentiment in contemporary adolescence : An examination of the sentiment model for contemporary Japanese adolescents. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 32, 100-109.)
- 大野 久 1987 女子短大生における充実感と同一性地位との関係 新潟青陵女子短期大学研究報告, 17, 63-76. (Ohno, H. 1987 The relationship between fulfillment sentiment and identity status in women's junior college students. *Research Reports of Niigata Seiryō Women's College*, 17, 63-76.)
- 大野 久 1991 青年期の充実感と学生生活との関係 新潟青陵女子短期大学研究報告, 21, 25-41. (Ohno, H. 1991 Fulfillment sentiment of undergraduate students. *Research Reports of Niigata Seiryō Women's College*, 21, 25-41.)

- 大野 久 1993 青年期の自律性, 主導性とそれにかかわる要因 新潟青陵女子短期大学研究報告, **23**, 57-68. (Ohno, H. 1993 On factors related to Japanese adolescent autonomy and initiative. *Research Reports of Niigata Seiryō Women's College*, **23**, 57-68.)
- Rasmussen, J. E. 1961 An experimental approach to the concept of ego identity as related to character disorder. *Dissertation Abstracts*, **22**(5-A), 1911-1912 (American University, Dissertation, 1961)
- Rasmussen, J. E. 1964 The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.
- 佐藤公代・赤澤淳子・寺川未央 1996 青年期における自我同一性の感覚と役割受容および充実感との関係 愛媛大学教育学部紀要教育科学, **43**(1), 81-91. (Sato, K., Akazawa, J., & Teragawa, F. 1996 Relationship between sense of identity, role-acceptance, and fulfillment sentiment in adolescence. *Bulletin of the Faculty of Education, Ehime University. Section I, Educational Sciences*, **43**(1), 81-91.)
- 佐藤公代 2001 大学生の価値観と充実感に関する研究 愛媛大学教育学部紀要 教育科学, **47**(2), 31-38. (Sato, K. 2001 Study on the sense of value and fullness in the university student. *Bulletin of the Faculty of Education, Ehime University. Section I, Educational Sciences*, **47**(2), 31-38.)
- 佐藤文字 1975 実存心理検査 岡堂哲雄(編) 心理検査学 垣内出版 Pp.323-343.
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で 教育心理学研究, **40**, 121-129. (Shimoyama, H. 1992 A study on the subclassification of moratorium of university students : In relation to identity development. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **40**, 121-129.)
- 杉村和美 1999 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達 岡本祐子(編) 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房 Pp. 55-86.
- 砂田良一 1979 自己像との関係から見た自我同一性教育心理学研究, **27**, 215-220. (Sunada, R. 1979 A study on ego identity related to self-concepts. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **27**, 215-220.)
- 谷 冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造—多次元同一性尺度 (MEIS) の作成 教育心理学研究, **49**, 265-273. (Tani, F. 2001 Structure of the sense of identity in adolescents : Development of the Multidimensional Ego Identity Scale (MEIS). *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 265-273.)
- 豊田秀樹 1998 共分散構造分析 入門編—構造方程式モデリング 朝倉書店
- 辻岡美延・小高 恵 1993 大学生の充実感に関する報告 関西大学「社会学部紀要」**25**, 47-62. (Tsujioka, B., & Kotaka, M. 1993 The fulfillment sentiment in university students. *Bulletin of the Faculty of Sociology, Kansai University*, **25**, 47-62.)
- 若原まどか 2003 青年が認識する親への愛情や尊敬と, 同一視および充実感との関連 発達心理学研究, **14**, 39-50. (Wakahara, M. 2003 The relationship between adolescents' attitudes toward, and their identification to their parents, and their sense of fulfillment. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **14**, 39-50.)
- 渡邊恵子・赤嶺淳子 1996 大学生のアイデンティティ地位・充実感・時間的展望 人間研究, **32**, 25-35. (Watanabe, K., & Akamine, J. 1996 Grade and gender differences of identity status, fulfillment sentiment and time perspective in university students. *Journal of Human Studies*, **32**, 25-35.)

付 記

この研究は立教大学から2002年度立教大学研究奨励助成金(国内研究)の助成を得た。

(2003.3.6 受稿, '04.5.24 受理)

*Fulfillment Sentiment and Inclusive Identity :
A Multiple-Indicator Multiple-Cause (MIMIC) Model*

HISASHI OHNO, MADOKA MOGAKI (RIKKYO UNIVERSITY), AKIKO MIYOSHI AND KAE UCHIJIMA (GRADUATE SCHOOL OF PSYCHOLOGY,
FACULTY OF LETTERS, RIKKYO UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2004, 52, 320-330

The main purposes of the present study were to construct a Multiple-Indicator Multiple-Cause (MIMIC) Model, based on the factors of the fulfillment sentiment model (Ohno, 1984), and to examine the structure of this model. The Multiple-Indicator Multiple-Cause Model hypothesizes that independence and self-reliance, solidarity, and trust affect the latent variable inclusive identity, and that inclusive identity affects fulfillment sentiment and satisfaction with life. The Fulfillment Sentiment Scale and the Satisfaction with Life Scale (Diener et al., 1983) were completed by 285 undergraduates. Covariance structure analysis was carried out in order to investigate the hypotheses of the Model. The results were as follows : (1) the goodness of fit index was high enough ; (2) the validity of the factors of the Fulfillment Sentiment Scale was reconfirmed; and (3) the model fit the data regardless of gender. These results with a college student population suggest that fulfillment sentiment is a sense of fullness, that is, the wholeness of a more inclusive identity, not only in adolescents but throughout one's life.

Key Words : fulfillment sentiment, covariance structure analysis, identity, college students